

その3 (令和3年4月7日～令和3年12月3日)

【校長のつぶやき】 その63 「登校率100%」

4月6日(火)は今年度最初の登校日。初日の登校率は「100%」、うれしいことに「欠席0」である。年度の始まりは、気持ちをリセットするチャンスでもある。子どもたちは、いい意味でリフレッシュをして新たな学年のスタートに臨むことができたようである。
27名の1年生を迎え、170名の子どもたちと「どんな1年になるか」、とてもワクワクしている。

【校長のつぶやき】 その64 「ミッション」

福島地区の小学校長会の総会があり、今年度の会長を務めることになった。小学校は福島市に46校、川俣町に5校、そして附属小学校があり、福島地区には52名の小学校長がいる。
校長会の目的は、「会員の職能の向上を図ること」と「福島地区教育の進展に寄与すること」である。福島地区の小学校に関わる全ての方の「笑顔」を実現するために、「鳥の目」を持ちこれまで以上に尽力していきたい。また、そこでの「学び」を、本校の教育活動にも最大限に還元していきたいと考えている。

【校長のつぶやき】 その65 「行きたい国1位 日本!」

土曜日の夜に「世界一受けたい授業」という番組をやっている。前回の内容の一つは「コロナが収束したら行きたい国!日本のスゴイところ!」であった。その理由である。1つ目は「日本人らしい謙虚さや礼儀正しい姿勢」、2つ目は「清潔力」、3つ目は「治安のよさ」、4つ目は「料理がおいしい」、5つ目は「相手を思いやる心」であった。解説をした外国の方は、その中のいくつかが、「給食」や「清掃」など“学校教育での体験”がベースにあることを話していた。
これまで外国との比較の中で、ややもすると否定的にとらえられることもあった日本人の有り様は、もしかするとこれからは“世界のスタンダード”になり得るのかもしれない。そのときには「日本の学校教育のあり方のよいところ」も世界へと広がっていけば、うれしい限りである。

【校長のつぶやき】 その66 「相性(あいしょう)」

人には「相性」というものがあると思う。その関係性を“説明可能”なこともあるし、“何となく”ということもある。相性がわるくてもたまに会うのなら問題はないが、毎日顔を合わせるとなると苦痛にもなる。
私は「担任」と「子ども」の間にも、この「相性」はあるのではないかと感じている。子どもや保護者の方の立場に立つと、相性のよい担任のときは「来年もまた受け持ってもらいたい」と思い、その逆のときは「担任が変わるといいな」と思う。相性であるから、その思いはそれぞれである。
と言いながら、私も本校在籍が4年目になってしまった。相性のわるさを感じている方には、全くもって申し訳ない次第である。ただ、私としては、「本校との相性は100%である」という“私の勝手な思い込み”を許していただければありがたいのだが・・・。

【校長のつぶやき】 その67 「歯磨きの点検」

ひょんなことから歯医者に通うようになった。土曜日に予約を入れているのだが、予約に入れられるのは2週間に1回のペースである。私の通っている歯科医院では、月初めには、「歯磨きの指導」がある。磨き残しがないかを点検して、私にあった歯磨きの方法を個別に教えてくれる。前は左の上の磨き方がわかったので気を付けていたが、今回は左下に磨き残しがあると言う。考えてみると、磨き残しは注意されるのだが、よく磨けているところをほめられることはない。また、毎回注意されるところが違って「イタチごっこ」の状態である。歯科医院は「親切心」で磨き方を教えてくれているのだが、こちらは月初めの歯医者通いが“苦痛”になってきた。よく磨けていない自分がダメなことを重々承知の上で、「他山の石」にしようと思った。

【校長のつぶやき】 その68 「桜 満開」

妻の実家に桜(種類は分からない)があるのだが、雪の重みで太い枝が折れてしまった。今回の冬は雪が多く、木々へのダメージは大きなものがあつた。枝を片付けようと思いよく見てみると、折れた太い枝にある細い枝の“桜のつぼみ”が膨らんでいる。そのままにしておくのも「かわいそう」に思うとともに、もしかしたら「花が咲くかもしれない」と思い、細い枝を切って自宅に持ち帰ってみた。花瓶に入れて置いておくと、次第につぼみは膨らみ、かわいらしい花が咲いた。あちらもこちら花が咲き、今は「満開」である。コロナ禍で外での「お花見」は通りすがりであつたが、室内でじっくりと「お花見」をし、その生命力を感じている。

【校長のつぶやき】 その69 「発達課題」

小学校における子どもの成長には大きなものがある。外見は同じようでも、内面には大きな変容がある。子

どもは大人の言うことを聞く存在だと思っていると、大きなしっぺ返しをくらうこともある。

1年生…教師や親がよいとすることをよいと判断し、いけないといっている事柄をいけないと判断する。

2年生…教師や親のような権威のある人の言動によることが大きい。他律時代からの脱皮は不完全である。

3年生…教師や親には次第に批判的になり、反抗的な態度をとることもある。

4年生…規範が仲間内にあるので、大人の規範とは合い入れないものも生ずる。

5年生…他人にも自分にも厳しく対するようになり、多少ぎくしゃくすることも起きがちである。

6年生…ほぼ大人と同様のレベルに達する。社会的な正義感も強まる。

大人を批判するような言動があったときは“喜ぶべきこと”なのである。内面が成長し、大人に近づいた証拠である。そして、どの子にとってもこの「発達課題」を一つ一つクリアしていくことが必要なことになる。

【校長のつぶやき】 その70 「プレバト!!」

毎週木曜日の午後7時から「プレバト!!」という番組をやっているが、その中に「俳句の才能査定ランキング」というコーナーがある。「お題」を受けた芸能人が、それぞれに俳句を披露する。それを元中学校国語科教師で現在は俳人の夏井いつき先生が、ズバッと切るのだ。添削をするその腕は確かで、新たに生まれ変わった俳句には輝きが増している。この番組には福島市出身（福島二小に通っていた）の梅沢富美男さんも「永世名人」として活躍している。

さて、この番組に触発された私の「マイブーム」は「俳句づくり」である。俳句をスマホに書き溜め、新聞社の読者欄に投稿してみた。2回投稿したが、未だ反応はない。おそらく「落選」であろう。

〈投稿した一句〉 「清明の風心地よしランドセル」

清明小学校の春の様子を、二十四節気の「清明」とかけてみた。おそらく夏井先生が見たら「季語の無鵠太遣い。『清明』には『心地よし』という意味が含まれている。『才能なし』」と言われそうである。

俳句に挑戦してみようと思うことは「言葉を吟味する経験ができる」ということである。「十七音（五七五）」という制限があるが故に、どの言葉が「自分の表現したいこと」にふさわしいか、浮かんだ言葉を入れ替えてみる。ピッタリした言葉に出あって胸に落ちると、完成である。

さて、この経験を子どもたちにもさせたらどうだろう。題して「五・七・五あそび」である。「あそび」の一つとして取り組んでみたら、「楽しい」のではないかなあ。

【校長のつぶやき】 その71 「スイセン&チューリップ」

昨年度の「学校だより 第33号」に載せた「校長のつぶやき その52」の続きである。雪が降る前に「スイセン20球」と「チューリップ90球」の球根を妻の実家の敷地に埋めておいた。雪が解け地温が上がり始めると、それぞれの花を咲かせ始めた。球根の種類もいろいろで、埋めた場所もいろいろなので「宝さがし」状態である。その分、「見つける楽しみ」もあるのかもしれない。この冬は雪が多かった。その期間をじっと耐えていたのかと思うと、愛おしさもひとしお（一入）である。つい“人生”に重ねてみたくなる。

【校長のつぶやき】 その72 「『60分』分の原稿」

「校長の話は長い」とはよく言われることである。どうしても“思い”を伝えようとする「くり返し」が多くなり、話がくどくなる。そうならないように、私は全校集会でも職員会議でも、なるべく「原稿」を書いている。「原稿」を書くのは「話を短くするため」である。

ところが、県校長会の副会長をしている関係で、県内の新しく教頭先生になられた方が集まる研修会で話をする機会を得た。その時間「60分」である。今度は「長く話すこと」に挑戦することになった。ハタと困った。考えた結果、やはり「原稿を書く」ことにした。

まず話の内容を“細かく”区切った。1つの話に充てる時間は「5分」である。それを「12」用意すれば「60分」である。原稿ができてからは声に出して読んでみた。時間を何回か計ったが、だいたい「50分」である。紹介の時間もあるだろうから、ちょうどよいかと思った。

そして、本番である。実際に話をしてみると「間」が入ったり「話のスピード」が変わったりするので、時間がおしてくる。「ラスト10分でまとめの話に入る」と決めていたので、うまく帳尻を合わせることはできた。緊張したのか「唾を飲み込めない」という体験もでき、自分にとっては大変貴重な経験となった。

【校長のつぶやき】 その73 「添削（てんさく）」

「校長のつぶやき その70『プレバト!!』」で、新聞の読者欄に俳句を投稿していると書いたが、なんと2回目に投稿した「俳句」が新聞に載った。

〔掲載句〕 春の夕水面大きくトラクター ※ 春の夕方、着々と田植えの準備が整っている様子に気づき、その感動を詠んだところが、である。何か違和感がある。改めて自分がつくった俳句を見てみた。

〔投稿句〕 トラクター水面に映える春の夕 ※「映える」を「大きく」へと変更してある。季語の位置が入れ替わっている

選者が添削して載せてくれていたのだ。おそらく、目立つように「残っている年賀状」に書いて投稿した私の意欲を損なわないように、気をつかってくれたのだろう。でも、私の達成感は“かなり”減少した。

これまで教員として、多くの子どもたちの作品を「添削」してきた。それは「よかれ」と思っていることであるが

添削された子どもの気持ちや “ちょっとだけ” 分かった気がした。そして次の目標は「直しナシ」である。

【校長のつぶやき】 その74 「松の剪定 その2」

昨年度の「学校だより」の「校長のつぶやき その32」で「松の剪定」について触れた。「今年はやったのですか？」と先日保護者の方に質問された。その答えは「今年もやりました！」 昨年は脚立が倒れ枝にぶら下がるという失敗があったが、今回は学びを生かして慎重に作業を進めた。2本は終えたのだが、実は、まだ作業をしていない松が1本ある。それは、てっぺんに鳥の巣がありヒナがいるからである。時折親鳥も見え隠れしている。ということで、ヒナが巣立つまで、作業は中断である。

【校長のつぶやき】 その75 「あの鳴き声は!？」

これまたヒナの話である。今から3年前、地域の方に教えていただいたのだが、体育館西側の木で「ササゴイ」という珍しい鳥がヒナを育てているという。その方が撮った親鳥の写真をいただいたので、校長室に飾ってある。先日校庭に出ていたときのことである。「クワァ」というような珍しい鳴き声を聞いた。そしてピンときた。「ササゴイ」の鳴き声だ。おそらくまたヒナを育てているのであろう。以前は親鳥を体育館の屋根の上で見かけたこともある。7月ごろには巣立つようだが、ヒナが巣窟に育つことを心から願っている。

【校長のつぶやき】 その76 「窓ぎわのトットちゃん」

黒柳徹子さんの書いた「窓ぎわのトットちゃん」が最近気になっていたのだが、本屋に寄ったら「発行40周年」の文字とともに目に飛び込んできた。以前読んだことはあるのだが、早速購入して読んでみた。「トットちゃん」とは黒柳徹子のことなのだが、小学校1年生で退学になっている。それは、昔の机はフタを開け閉めするタイプだったが、その開閉をいつまでも繰り返していたり、教室の窓のところでチンドン屋さんが通るのを待っていたり、ツバメに「何しているの」とずっと話しかけていたり、担任の先生もほとほと困ってしまってお家の方に話があり、お家の方の判断で学校を移ることになった。そして、転校した学校が「トモエ学園」である。その小学校での「楽しい話」がここから続くのだが、興味のある方はぜひお読みいただきたい。

さて、そんな小学生だった黒柳徹子さんも、今やその活躍は多岐にわたる。何にでも興味をもつ「好奇心」が「今に生きている」のだらうと思う。小学校で子どもの姿を見ていると、つい近視眼的になってしまうのだが、「鳥瞰的な目」と「広い心」をもって子どもの成長を見ていこうと、この本を読みながら改めて思った。

【校長のつぶやき】 その77 「目標達成！」

* 番号がズレていたので、ここから修正します。

「校長のつぶやき『添削』（5月21日版）」で、新聞に俳句が載ったが選者が推敲してくれていたのも、次の目標は「直しナシ」だと書いた。そうしたら、うれしいことに早速実現してしまった。私の4回目の「投稿句」が6月6日の某新聞に「そのまま」載った。

【掲載句（投稿句）】 コロナ禍や老父を師匠に緑摘む * 緑摘み…松の新芽を摘み、形を整える作業（春の季語）

2週間前の「校長のつぶやき」に「松の剪定」を今年もしたことを書いたが、そのときの様子を詠んだものである。「老父」と書いて「父（ちち）」と読ませる。

さて、この話のオチであるが・・・、ただ「プチ自慢」をしたかっただけである。「ブタもおだてりゃ木に登る（?）」という言葉もあるようだが、“調子にのって”これからも俳句の投稿を続けていこうと思う。

【校長のつぶやき】 その78 「おやじの会」

実は、わが子が幼稚園の年長組のときに「おやじの会」の会長をしていた。「おやじの会」の目的は、「夏祭り」の企画・運営である。大枠はそうは変わらないので、コーナーの分担をして、朝から準備をして、夕方からが本番といった感じである。酒は「付物（つきもの）」だと思い、片付けが終わってから近所の寿司屋で“打ち上げの会”を行った。そして、これが盛り上がった。最終的には、運動会で「おやじダンス」をやることになった。曲は「およげ! たいやきくん」と決まり、スポーツジムでインストラクターをしていた「おやじ」がダンスを考えた。運動会の前に集会所で練習会を数回開き、当日を迎えた。「おやじダンス」はサプライズ企画である。プログラムにも載っていない。それは突然の音楽とともに始まった。それぞれの場所から“おやじ”が園庭中央に集まり、一糸乱れぬ(?) ダンスを繰り広げた。サプライズ企画は大成功である。

学校には「PTA」という組織はあるのだが、“おやじ”のネットワークを生かした「おやじの会」も、おもしろいものである。

【校長のつぶやき】 その79 「ととのう」

最近、「ととのう」という言葉を、見たり聞いたりする場面が続いた。1回目は、県校長会の会議に行った時である。隣にいた郡山市の方に「何か運動をなさっているのですか」と聞いたら、「走っています。大会にも出ています。」という答えに続き、「走ると、体が“ととのう”のです。それが、好きなのです。」と話されていた。2回目は、地区校長会の会報の原稿である。ある方が「ととのう」という題で、自分の趣味について触れていた。それは、「サウナ」である。サウナに入ったり水風呂に入ったりを繰り返すと、体が“ととのう”のだそうである。あまり“ととのう”という言葉を使ったことがなかったので、新鮮な感じがした。

さて、私の“ととのう”は、暑い中での“機械での草刈り作業”だろうか。刈った草が揃うように、回転刃を右から左へと動かす。歩きながら端まで刈ると戻ってきて、また同じ作業を繰り返す。最初は頭の中は“雑念”でいっぱいである。しかし、単純作業を繰り返すなかで、汗とともに頭の中は“無”に近づいていく。もしかすると、あれが“ととのう”という感覚なのだろうか。保護者の方の中にも“ととのう”感覚が分かる方がおいでになることだろう。また、子どもの中にも、言葉にはできなくてもすでに感じている子がいるかもしれない。皆さんの“ととのう”場面を、ぜひ教えていただけるとありがたい、と考えている。

【校長のつぶやき】 その80 「火起こし顛末記」

油断をしていた。宿泊学習がこんなに「火」を使うものとは…。1日目の「焼き板づくり」、2日目の「野外炊飯」そして「キャンプファイヤー」と、何もなかったところからマキを組み、新聞紙に火をつけて「炎」を大きくしていく。「火起こし」をいつしかの記憶も定かでない自分としては、“不安”がとても大きかった。

その「野外炊飯」のことである。見たら、1つの班の「釜」の火が消えている。「火の管理担当」の自分としては、見過ごすことができない。火を起こし「吹きこぼすまで」と思って、マキをどんどん加えていた。その結果、「ごはん」は焦げ、子どもたちのテンションは大きく下がっていた。「焼きおにぎりをカレーで食べるのもいいですよ」という“やさしい言葉”に支えられ、「思い出に残るカレーライス」の時間は過ぎた。

実は、ここからが大変だった。「焦げた釜」を元通りにしないと、「片づけてよい」という所員のOKがない。みんなで交代しながら必死で釜を磨いた。その協力する子どもたちの姿は、本当に素晴らしかった。

今まで「白いごはん」が出てくるのは、子どもたちにとって“あたり前”だったことだろう。「ルーのかたまりがちょっと残ったカレー」を食べることはなかったであろう。「野外炊飯」の体験から、「親」への感謝の気持ちや、日々の「あたり前」への感謝の気持ちを感じてもらえたら、うれしい限りである。

【校長のつぶやき】 その81 「私とあなたの生活習慣」

引率に行くと、子どもたちと一緒に風呂に入る。いつものことだが“大きい風呂”を見て、子どもたちは興奮気味であり、隙あらば泳ごうとしている。一応、校長の目は気にしているようだが…。

ふと見ると、ある子が歯磨きをしている。おそらく家でも風呂に入った時に歯を磨くのであろう。それは、彼の「習慣」である。それを見ていた別の子に、歯を磨き始めた子がいた。推測ではあるが、ほかの子の「習慣」に触発されてマネをしたのかもしれない。その場面を見たときに、集団生活は「私とは違う生活習慣」に触れる機会にもなるのだらうと思った。

2泊3日の集団生活は、“私”と“あなた”の「生活習慣の違い」を感じ、「自分の習慣」を見直す機会にもなったのかもしれない。

【校長のつぶやき】 その82 「本校の子どもたちのよさ」

子どもたちの「5分前行動」の意識は高かった。活動も1時間に進めることができ、余裕時間を多く取ることができた。「シューズのかかとをそろえること」もよくできていた。

そして、何よりも特筆すべきは「男女の垣根なく仲がよい」ことである。3日目の「オリエンテーリング」が終わって時間があつたので「アスレチック」で遊ぶ時間を作った。丸太が並んでいたり、タイヤが埋まっていたりしたが、自分たちで遊び方を工夫して、心から楽しそうに遊んでいた。

「退所の集い」の挨拶では、「宿泊学習」の目的である「規律・協力・奉仕」に取り組んだ子どもたちの姿に「花丸（大変よくできました）」を与えた。とともに、「仲間に甘えず一人一人がもっと高まっていこう」と話した。今回の宿泊学習を契機に、さらに子どもたちが成長し、立派な最上級生になることを期待している。

【校長のつぶやき】 その83 「保護者の皆様への“感謝の気持ち”を込めて」

コロナ禍で「感染リスク」も心配される中、宿泊学習に子どもたちを送りだしてくださった保護者の皆様に御礼を申し上げます。他地区ではあるが、保護者の方から不安の声が上がり、宿泊学習が中止になった学校もあると聞いている。また、保護者の方には費用も負担していただいている。今回、充実した体験活動を行うことができたのも、保護者の皆様のお陰と心より感謝している。なお、「帰校のつどい」では、この「感謝」について話をしたが、子どもたちは自宅に帰って“感謝の気持ち”を伝えただろうか。伝え忘れたとしても、子どもたちの「楽しかった」の一言が、何にも勝る「感謝の気持ち」の表出であったかもしれない。

【校長のつぶやき】 その84 「ブタもおだてりゃ 木に登る(?)」

「校長のつぶやき その77『目標達成!』」で「ブタもおだてりゃ 木に登る(?)」と書いた。「?」を付けたのには訳がある。私の頭の中では「サルもおだてりゃ 木に登る」という言葉の方が、よりインプットされていたからだ。では、この2つはどう違うのか。

「サルもおだてりゃ 木に登る」

できて当たり前のことをほめられて、調子に乗ってやってみせることは滑稽なことである、という例え

「ブタもおだてりゃ 木に登る」

能力の低いものでもおだてられると、調子に乗って能力以上のことができちゃう、という例え

という意味なので、「サル」ではなく「ブタ」にした。そうしたら、「イヌ」も木に登るらしい。

「たのめば、犬も木に登る」

人にたのめると、できるはずのないことまで、何とかやってみようという気になる、という例え

結局は、方法は違えども、「サル」も「ブタ」も「イヌ」も“木”には登るのだ。「子ども」を「動物」に例えては失礼ではあるが、「ほめたり」「おだてたり」「たのんだり」と子どもを“よい気分”にさせることが肝要なのだろう。逆に言うと、その「子ども」に合った方法を使えば、“目標”は達成できるということである。何もこれは「子ども」だけの話ではなく、「おとな」も同じであることはいうまでもないことだが…。

【校長のつぶやき】 その85 「青天を衝け」

NHK 大河ドラマは、渋沢栄一を扱った「青天を衝け」である。このドラマが、実におもしろい。栄一は、藍農家に生まれ、縁あって一橋家に仕官し、一橋慶喜が将軍になったため幕臣になる。そして、慶喜の弟が万博へ行くのに付き添い、パリへと行く。今は、このあたりまで話は進んだ。これが実話であるから、人生とは不思議なものである。さて、パリへと出発する前に、栄一と慶喜が徳川家康の「ご遺訓」を唱える場面があった。「遺訓」とは、「子孫への教訓」である。

〈徳川家康「遺訓」の意味〉

人の一生というのは、重い荷を背負って遠い道を行くようなものだ。急いではいけない。不自由が当たり前と考えれば、不満は生じない。心に欲が起きたときには、苦しかった時を思い出すことだ。がまんすることが無事に長く安らかでいられる基礎で、「怒り」は敵と思いなさい。勝つことは知り、負けを知らないことは危険である。自分の行動について反省し、人の責任を攻めてはいけない。足りないほうが、やり過ぎてしまっているよりは優れている。

この遺訓は、400年ほど前のものであろうが、現在にも通じるものがある。“家康派”の私は同感するのだが、皆様はどんな感想をお持ちだろうか。もし子どもに聞いたとしたら、「がまんするなんていやだ」「負けるなんていやだ」と、逃げられてしまいそうである。子どもには伝わらないだろうなあ、このよさは…。

【校長のつぶやき】 その86 「包み込む」

最近の世の中の風潮で気になることは、みんなが「正しさ」を主張することである。ただし、その「正しさ」とは、自分の視点から見た「正しさ」である。例が適当であるかは分からないが、「オリンピックを開催する方がよい」という考えの人は「開催しない方がよい」という考えを否定する。その逆もしかりである。互いの「正しさ」の主張は、決して交わることはない。

しかし、考えてみると、どちらも「同じ面」に立っていて、「光」の当て方が違うだけのような気がする。もし、解決を図るのであれば、もっと高みにある「違う面」に立つ必要がある。どちらの「正しさ」も包み込むような「第三の案」である。本校は「道徳科」を研究教科としているが、ねらいは「多面的・多角的」に物事を考えることのできる子どもに育てることにある。「道徳ノート」にその痕跡が見られるようになってきた。本校の子どもたちが、すべてを「包み込む」ことのできるような広い視野を持つ子どもに育ててくれたら本望である。

【校長のつぶやき】 その87 「検温」

毎朝、7時30分から検温をして、子どもたちを校舎へ入れている。自宅で体温を測ってきてはいるが、記入した用紙を昇降口でランドセルから出して一人一人確認するのは手間がかかるので、当番の教師による「検温」という形を取っている。（自宅での検温の結果は、担任が確認している）この検温の器具に一長一短がある。

教育委員会から支給された「手動式の非接触型体温計」は、測定する人が必要であり、また外気温の影響を受けやすい。冬には測定不能になってしまうことがあった。その次に購入した「自動測定の手動式非接触型体温計」は、やはり測定する人が必要であり、また太陽の光が強いときには、人ではなく建物の温度を拾ってしまう。そして今回購入したのが、自分で画面を見て測定することのできる「タブレット型の手動式非接触型体温計」である。「レベル1」になった際には、子どもが自分で体温を確認し、校舎内に入ることを想定している。

しかし、これにも盲点があった。それは「子どもの身長」である。6年生と1年生では身長が違いすぎて、高さの調節が難しい。ここは高学年には申し訳ないが、膝を折って背を低くして測ってもらうことにしよう。

【校長のつぶやき】 その88 「サギにあった・・・ようだ」

私はよく通信販売で買い物をする。今までトラブルに巻き込まれることはなかった。

さて、3週間ほど前、親父がパソコンのプリンターが壊れて困っていた。新規の物にすると、パソコンが合わず、パソコンも買わなくてはならないらしい。そこで、親孝行と思って同型の中古の品をネットで注文した。注文をすると「入金を確認したので品物を送る」旨の返信があった。来るものと思って待っていたが、いつまで経っても品物が届かない。しびれを切らしてメールを送ってみたが、何の返答もない。躊躇はしたが、電話を試みたら「現在使われておりません」との音声。そこで初めてだまされたことに気付いた。改めてその「会社名」で検索をしたら、サギの情報がでてきた。ただ、幸いなことにクレジットカードで他の物が購入された形跡はなく、すぐにパスワードを変更した。

だまされているのに何だが、まずは「だまされない賢い子ども」に育てる教育を行う必要を感じた。それとと

もに、「だます側の子ども」に育てない教育が、もっと大切であると感じた。安くはない代償ではあったが、とりあえずは「校長のつぶやき」の「ネタ代」と思うことにした。（泣き寝入りをしたくはないのですが…）

【校長のつぶやき】 その89 「風の時代」

「藤井 風」というアーティストがいる。妻がファンなのだが、「自分が見つけたのだ」と自負していて、だいぶ熱を上げている。9月4日（土）には「Free」と題した無観客でのコンサートが日産スタジアムで行われ、その映像がYouTubeで配信された。私も（付き合いで…）リアルタイムで視聴したのだが、最大17万人がアクセスした中の一人ということになる。ピアノの弾き語りで歌う雨の中でのコンサートは、大変感動する内容であった。私もファンの一人になった。

さて、「風」という名前であるが、まさに時代に合った名前のように思える。一説には、時代は「地の時代」から「風の時代」に移っていくという。振り返ってみると、東日本大震災の「前」と「後」では、学校運営も大きく変わった。「前」は「これまで通り」でよかったような気がするが、「後」は「変化をおそれず最適解を導き出すこと」が必須となった。それを「風の時代」と呼ぶのなら、コロナ禍の今は、「風の時代」の中にいるとも言える。ただ、100年後から見れば、まだ「風の時代」の入口に過ぎないのだろうとも感じている。

【校長のつぶやき】 その90 「ゴミをひろう人」

朝、南町付近に立っていると、「ゴミをひろう人」がいる。通勤をしている男性の方なのだが、ゴミを拾う姿を2回見た。私の立っている目の前のゴミである。タバコの吸い殻やお菓子のゴミだったかと思うが、ポケットからビニール袋をサッと出して拾い、何事もなくったかのように、また歩み出していく。私は「気づかなかった」のではなく「気づく目がかもっていた」のだと思う。その方の姿に接し、とても自分を恥ずかしく思った。おそらくその方にとって「地域は自分の家と同じ感覚」なのだろう。私も率先して「ゴミをひろう人」になるとともに、その方のように自分の姿を通して、「後ろ姿」で子どもたちを感化できるような、そんな教育者でありたいと肝に銘じた。

【校長のつぶやき】 その91 「本校で出会った必然」

公立学校の特徴は「学区がある」というところである。例外はあるが、「住居のある学区の学校へ通う」ということが基本になる。申し訳ないのだが、子どもや親は「通わせる学校を選ぶ」ことはできない。

そして、「たまたま」「同じ学区に住んでいる」という理由で集まった子どもたちと、「たまたま」「人事異動で配置された」教職員が、同じ学び舎で、同じ時を過ごしていく。「たまたま」ではあるが、そこには出会うべくして出会った「必然」がある。

そのような中で、本校の子どもたちが「自らの高まり」を感じながら活躍してくれていることは、うれしいことである。そして、その陰には、本校教職員の「子どもたちのために」という「熱い思い」と「献身的な指導」がある。「素直で前向きに学ぶ子どもたち」と「力のある教職員」のいる学校に、「たまたま」配置されている校長の私は、とても「幸せ者」である。

【校長のつぶやき】 その92 「このままでよい」

私は不思議であった。他校と比べても、運動能力の高い子どもが多いわけではないのに、市陸上競技大会で好成績を収めていることを。今回も総合成績で「58点」という得点を取ったが、これは優勝してもおかしくないほどの高得点である。本校の「強み」は、子どもたちの「モチベーションの高さ」と指導による「技の習得」が「うまくいっている」ことにある。「80mH」と「走り幅跳び」での活躍にその効果が顕著である。

ただ、このコロナ禍で、昨年度から6年生のみが出場する大会となった。また、ステップアップに活用してきた陸上大会にも中止されるものが出た。条件はみな同じではあるが、その影響もあることは否めない。

しかし、本校は「このままでよい」と考えている。「走ることが大好き」「跳ぶことが大好き」な子どもたち、それが一番大切なことである。「陸上清明」の伝統は、今年も子どもたちの手によって引き継がれた。

【校長のつぶやき】 その93 「『励ましオウム』を肩に乗せるために」

子どもの肩には「オウム」が乗っています。そして、その「オウム」は、常に子どもにささやきかけています。そのささやきには、「ネガティブ」なものもあります。

〈ネガティブな「オウム」のささやき〉

心配オウム …「きっと対処できない」「ひどい結果になるに違いない」「こうなったらどうしよう」
あきらめオウム…「自分にできるわけがないよ」「それは自分の手に負えない」「変えるなんてできない」
罪悪感オウム …「自分のせいだ」「全部自分が悪いんだ」「それは私の失敗だ」
非難オウム …「うまくいかないのは誰かのせいだ」「自分は悪くない」「あいつらが悪いんだ」
正義オウム …「そんなことはすべきではない」「それは正しくない」「不公平だ」
敗北者オウム …「私は何をやってもダメに決まっている」「自分なんか役に立たないに違いない」
無関心オウム …「どっちでもいい」「知ったことではない」「別に」「興味ない」

この「ネガティブなささやき」は、その子の「物事のとらえ方」から出てきます。お子さんの口から出てくる「オウム」のささやきで多いのは、どの「オウム」ですか。

では、「自己肯定感」の高い子どもの肩には、どんな「オウム」が乗っているのでしょうか。その一つが「励ましオウム」です。

＜「自己肯定感の高い子」の「オウム」のささやき＞

励ましオウム …「だいじょうぶだよ」「よくがんばっているよ」「やればできるよ」「がんばろう」

そのような「励ましオウム」に変えていくために、どのようにしていけばよいのでしょうか。

＜「励ましオウム」に変えるために＞

- 「自分は人に理解され、大切にされていること」を伝え続ける。実感させる。
- 「自分が困ったときに助けを求めることは勇気ある行動であること」を伝え続ける。実感させる。
- 「強みも弱みも含めて自分らしさを大切にすることが大切であること」を伝え続ける。実感させる。
- 「自分にはできると信じる心が大切であること」を伝え続ける。実感させる。
- 「物事のよい面に目を向けることが大切であること」を伝え続ける。実感させる。

そして、何よりも大切なことは、まわりにいる「大人」が、その「モデル」となることではないでしょうか。「励ましオウムを肩に乗せろ」と言ったから、突然「ネガティブなオウム」から「励ましオウム」に変わるわけではありません。子どもは、親や教師や自分に関わる人の姿を「モデル」として、その「生きる姿勢」を「内面」に取り込んでいくのだらうと思います。

私も「ネガティブ沼」にはまりそうになることがあります。そんなときは「過去には戻ることはできない。いまからここからだ。」と自分に言い聞かせます。そして、寝てしまいます。一晩寝ると忘れてしまうのが「自分のよいところ」です。

放課後の自習室を「いまここ学習室」と名付けています。この名には、「いま・ここを大切にしてほしい」「いまから、ここから自分を変えることができることを知ってほしい」という願いを込めています。

【校長のつぶやき】 その94 「もう一つの『校長のつぶやき』」

私の校長初任は、郡山市の小学校だった。その学校は廃校になって、もう今はない。やはり「学校だより」を毎週出し、気が向くと「コラム」を書いていた。懐かしく思い、初めて書いた「コラム」を読み返してみた。

「子どもに花丸を」

始業式で子どもたちに「目標を決めて、それができたときは、自分で自分に“花丸”をあげよう」という話をしました。「自尊感情」という言葉があります。どうしたら、この「自尊感情」は育つのでしょうか。私は仮定として「花丸」をいっぱい持っている子は、自尊感情が高いのではないかと考えました。教師や親にほめられて“花丸”の数が増える、友だちに「ありがとう」と言われて“花丸”の数が増える、人がくれないときには自分で自分をほめて“花丸”を増やす。そういう好循環になった子は、「私はできる」「私は乗り越えられる」「私は価値がある」という思いが育まていくのではないのでしょうか。でも、自分で“花丸”は寂しいので、教師や親からもらえばいい“花丸”をあげたいものですね。

「7年経っても、書く内容が成長していないな」と思うとともに、“変わらない自分”がうれしくもあった。

【校長のつぶやき】 その95 「“10分”の効果」

本校で「午前5校時」の日課表を採用して3年目になる。福島市では広がっていないが、会津若松市では採用する小学校が増えてきたという話を聞いている。

さて、昨年度と今年度の違いは「昼休みを10分増やした」ことである。本来は「毎日6校時時代に児童の負担を少なくする（特に4年生以上）」ことと「職員の事務時間を確保する」ことを目的に始めたことであるので、「下校時刻を少しでも早める」ことが“正解”である。しかし、これまでの実践から届いた「声」を生かし、あえて“不正解”を選ぶことにした。

そして、「その効果には大きなものがあった」と感じている。まず感じるのは、校庭に出て遊ぶ子どもの数が増えたことである。特に下学年はよく遊んでいる。もちろん、図書室で静かに本を読んでいる子や、教室で友だちと話をしている子もいる。そういえば、市陸上大会に向けてリレーの練習をする姿も見られた。“不正解”を選んだことは「子どもの笑顔」につながった。

私は「試み」という言葉が好きなのだが、“よりよきもの”へと高めていく営みは、楽しいものである。

【校長のつぶやき】 その96 「バズった？」

「本校Web ページ」にアクセスしたときに「カウンター」を見るのだが、先週見たときには「自分が担当してからのプラス20万アクセスはまだ先だなあ」と思っていた。ところが、月曜日に見たら「214338」となっていた。「目標達成」である。キツネにつままれたような感じである。「もしかしたら、外部の方が清明小を注目するような何かが起きたのだらうか」と戦々恐々としていたが、そんな動きはないようだ。おそらく私の「勘

違い」だとは思いますが、たくさんの方に見ていただいていることは、発信を行う「私の励み」となっている。

【校長のつぶやき】 その97 「旅は いつも おもしろい」

校長になってから、すべての「修学旅行」と「宿泊学習」の引率を行ってきた…はずである。それが「校長の仕事」だと思っているからである。旅にハプニングは“つきもの”である。体調をくずす子はいし、ケガをする子もいる。事故にあうこともある。そんなときに「どう対応するか」の判断を適切に下すためには、校長が近くにいた方がよい。（学校の子どもたちは教頭先生に任せても、いつもの延長線上で判断はできるであろう。）

と格好をつけたが、ついていくのは、ただ単に“おもしろい”からである。引率をする最大の“おもしろさ”は、子どもたちの「新たな一面」を発見できることである。今回の旅でも、「社会の約束を守る節度ある姿」「まわりの人々への礼儀正しい姿」「仲間と仲良く協力する姿」など、子どもたちの「よさ」をたくさん感じてきた。それを表現する何かうまい言葉がないかを考えていたが、浮かんだのは「品格」である。これまで「陸上清明」や「清明魂」などの言葉を使ってきたが、今回の旅で「清明の品格」という新たな言葉が加わった。

【校長のつぶやき】 その98 「教育的意義」

「教育的意義」とは何だろう。というのは、あることで「教育的意義」が「ある」か「ない」かという意見交換を随分したからである。「同じもの」を見ていても、捉え方で“180度”見方が変わることを知った。

でも考えてみると、「教育的意義がない教育活動は一つもない」とも言える。それは、「すべての経験には意味がある」からである。「二つの道」があったときに、「経験しなかった道」はすでに消えている。「自分が経験した道」しか「学び」にはならないので、それは「教育的意義」があったということになる。

さて、今年度も次年度の構想を考える時期が近付いてきた。「あれもこれも」はできないので、子どもたちの実態をとらえながら「学ばせたいこと」「体験させたいこと」を選び、それを「必要な時期」に配列していくことになる。そのときに大本になるのは「教育目標」である。言わずと知れた本校の教育目標は、「みんなとともに笑顔いっぱい」である。「まなびあい」「みとめあい」「たかめあい」を大切にしながら、残り4か月を子どもの「笑顔」を実現するために尽力するとともに、次年度のよりよい計画づくりに臨む覚悟である。

【校長のつぶやき】 その99 「自画自賛」

教師は「反省」が大好きである。最近あまりやらないが、「反省文」を書かせて反省を促すという方法をよく用いた。でも、「反省」という方法は、ベクトルが「過去」に向いているし、凹凸の「凹」に目が向いている。「できない自分」に目を向けても、気持ちは上向きにはならない。

今年の7月、東北地方の小学校長が集まる研究大会が福島市を会場に行われる…はずであった。しかし、コロナ禍のため「紙面」での開催となった。10月末に東北各県の小学校長の代表がオンラインで集う理事会が行われたが、その際に設定された実行委員長の御礼の場で、私からは「反省」ではなく「自画自賛」をさせていただいた。「コロナ禍での紙面開催を成功に導いたこと」「紙面開催ではあったが分科会での研究を充実させたこと」「主催の福島県小学校長会、実行委員会を務めた福島地区小学校長会の底力を確認することができたこと」叩けば「埃」はいっぱい出てくるのだが、「良い面」にだけ目を向けさせていただいた。

日本人は謙虚さを好むので「自画自賛」をした私は陰で笑われているかもしれないが、福島大会に取り組んだ私の「自己肯定感」はより高まり、そのことでの「心身の状態」はすこぶる「健康」である。

【校長のつぶやき】 その100 「自己満足」

まさに「自己満足」ですが「100つぶやき」を振り返ってみます。だんだん図々しくなって「つぶやき」が増えてきています。さて、自分の中には「ベスト1」はあるのですが……。それは「秘密」です。

【「100つぶやき」一覧】

平成30年度 「11」つぶやき		
その 1「あいさつの“距離感”」	その 2「生活の“リズム”」	その 3「保護者も“笑顔”になるために」
その 4「“たいじょうぶ”と言える自分に」	その 5「“ルール”と“リレーション”の確立」	その 6「安全な登下校のために」
その 7「清明魂（せいめいたましい）」	その 8「“たかめ”“くつろぎ”“さだめ”“くつろぎ”」	その 9「マーキング」
その10「子どもの“キャラ設定”は変わるのか？」	その11「“いま、ここ”の気持ちを大切に」	・
令和元年度 「18」つぶやき		
その12「昭和、平成、そして“令和”の時代へ」	その13「スケージング・クエスト」	その14「押すか、引くか……」
その15「“脳”を意識する」	その16「市内で一番の子どもたちに」	その17「学校と保護者が手を取り合って」
その18「“イチヨウの実”は、なぜ臭うのか ー 校長の自由研究 ー」	その19「“イチヨウの実”は、なぜ臭うのか ー 校長の自由研究 その2ー」	その20「同期のサクラ」
その21「保護者による“車での児童送迎”で 危機していること」	その22「ネット依存」	その23「『教育活動の充実』と『働き方改革』 のバランスの中で」
その24「おみくじ大吉」	その25「体に良い“生活リズム”とは」	その26ー1「次年度へ向けた構想 その1」
その26ー2「次年度へ向けた構想 その2」	その27「個別最適化された学び」	その28「普通とは」

令和2年度 「34」つばやき		
その29「もう戻れない」	その30「子どもの学びをすすめるために」	その31「オンライン授業」
その32「松の剪定」	その33「ちょっといい話」	その34「運動着啓略」
その35「歸郷曲」	その36「どうせ自分なんて」	その37「リーダーシップ」
その38「ハチにご注意！」	その39「子どもは成長している」	その40「“北風”と“太陽”と」
その41「PTAのトリセツ」	その42「校長の見ている景色」	その43「分身の術が使えたら・・・」
その44「“ケの目”の風景」	その45「『エール』のある場面」	その46「校長がお似合い!？」
その47「一芸に秀でる」	その48「お迎えの車をどのように…」	その49「震災からまもなく10年」
その50「+α（プラスアルファ）の言葉」	その51「交通事故の絶無を！」	その52「ささやかな実験」
その53「赤裸々な気持ち」	その54「転校生がいっぱい来るといいなあ…」	その55「子どものため とは」
その56「努力する才能」	その57「待つことの大切さ」	その58「『小さな読者』からのエール」
その59「春ですね」	その60「チーム清明 その1」	その61「チーム清明 その2」
その62「チーム清明 その3」	.	.
令和3年度 「37」つばやき		
その63「登校率100%」	その64「ミッション」	その65「行きたい国1位 日本!」
その66「相性（あいしょう）」	その67「歯磨きの点検」	その68「桜 満開」
その69「発達課題」	その70「フレバト!」	その71「スイセン&チューリップ」
その72「『60分』分の原稿」	その73「添削（てんさく）」	その74「松の剪定 その2」
その75「あの鳴き声は!？」	その76「窓ぎわのトットちゃん」	その77「目標達成!」
その78「おやじの会」	その79「ととのう」	その80「早起こし顛末記」
その81「私とあなたの生活習慣」	その82「本校の子どもたちのよさ」	その83「保護者の皆様への“感謝の気持ち”を込めて」
その84「フタもおだてりゃ 木に登る(?)」	その85「青天を衝け」	その86「包み込む」
その87「検温」	その88「サギにあった・・・ようだ」	その89「風の時代」
その90「ゴミをひろう人」	その91「本校で出会った必然」	その92「このままでよい」
その93「『耐ましオウム』を肩に乗せるために」	その94「もう一つの『校長のつばやき』」	その95「“10分”の効果」
その96「バズった?」	その97「旅はいつも おもしろい」	その98「教育的意義」
その99「自画自賛」	.	.